

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成28年8月10日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 仲 尾 友 貴 恵

助成の種類	平成28年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第3回国際社会学会社会学フォーラム		
発表題目	インペアメントは何を可能にするのか —アフリカ都市の—事例から— Capturing What Impairment Enables: A view from an African Urban Situation		
開催場所	ウィーン大学(オーストリア・ウィーン)		
渡航期間	平成 28年 7月 8日 ~ 平成 28年 7月 17日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	旅費(渡航費・滞在費・現地交通費含む)	302,383円
		参加費・登録料	47,617円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回の成果発表は、私にとっては出産後初の公的な研究活動の場への復帰であり、初の乳児を伴っての渡航となりました。したがって、旅程がタイトになり過ぎないようにスケジュールにゆとりをもたせたり、会場では託児サービスを利用する等の必要がありました。このような事情があった私には、事務手続きや助成金の使途範囲に柔軟性がある貴団の助成金はとても使いやすく、安心して発表に専念することができました。心より感謝申し上げます。		

成果の概要／仲尾友貴恵

1. 集会の全体概要

今回参加したのは、2016年7月10日から15日の5日間、オーストリアのウィーン大学で行われた、国際社会学会 (International Sociological Association: ISA) 主催の第3回社会学フォーラム (Third ISA Forum of Sociology) である。ISAは、学派・研究手法・主義の境界を超えた世界規模での社会学的知識の交流促進を理念目標とし、1949年にUNESCOの後援を受けて設立した社会学分野では世界最大規模の国際学会で、公式情報によると2014年時点で57カ国の国レベル学会組織を含む142団体会員、および、167カ国からの約4300人の個人会員から構成される¹。

同学会は設立当初から4年に1度、世界社会学会議 (World Congress of Sociology) を開催し、個々の研究者に研究成果発表の場を提供してきたが、今回参加したフォーラムは2008年から始められた新しい試みで、世界社会学会議と2年ずらして4年に1度開催される。その趣旨は、最新の研究成果をふまえた学術領域レベルの問題点をめぐる議論の場の提供であり、フォーラムでは各セッション主催者が議論のトピックを設定し、召集された研究者がトピックに沿って議論材料として発表をおこない、各人の発表後にそれらをふまえた総合討論が行われる。今回は合計700以上のセッションが開催され、ISAが主催する研究集会としては史上最多の5,000人以上が参加した。



会場のウィーン大学正面入り口にて

2. 発表が行われたセッションの位置づけと発表内容

報告者の発表は、「逸脱と社会統制研究会」(Research Committee 29: Deviance and Social Control) が主催する9セッションのうち、「逸脱の構築に代わる多様性の評価—社会学的研究のための新たな観点の可能性 (Valuing Diversity Instead of Constructing Deviance: A Future Perspective for Sociological Research?)」で行われた。マイノリティを対象とする社会学的研究では、これまで「逸脱」理論が主流を占めてきたのに対し、近年、従来は政策研究や経済学などの分野で議論が行われてきた「多

¹ ISA 公式ウェブサイト(<http://www.isa-sociology.org/>)、および2014年ISA横浜大会ウェブサイト(<http://www.wcs2014.net/content/isa>)。

様性 diversity」に基づく分析枠組みが注目を集めつつある。当セッションの議題は、この「多様性」という観点が社会学的研究にいかに応用可能かを、これまで「多様性」の議論においては比較的に取り扱われてこなかった「障害 impairments/disability」を分析対象として議論するものである²。

報告者の発表の内容は、報告者がこれまでタンザニアの都市ダルエスサラームで継続的に行ってきたフィールドワークに基づき、路上の零細商売人と警察との関係性を事例として、近年グローバルな展開を見せる障害者の権利保障運動の影響を受けてタンザニアでも公共圏（行政、マスメディア、市民社会等）においては特定の人々を「障害者」という包括的呼称で言及することが増えてきているものの、日常生活場面においては、人々は全く異なる基準で人々を区別していることを提示するものだった。フィールドワークから得られた一次データだけではなく、他のアフリカ都市に存在する、顕示的「欠損」をもつ人々による職業集団にも言及しながら、いわゆる北側社会では「欠損 impairment」や「障害 disability」として、〈足りていないこと〉が強調される特定の身体特徴が、多様な人々がインフォーマルセクターでひしめき合うアフリカの都市空間では生計維持活動の資源となり得ることを示した。このようなミクロな生活実践を社会学的に分析するには、彼らがときに資源とする身体特徴を文脈から切り離して先験的に、スティグマを付された逸脱者と見なす観点、あるいは、ケアの対象の同定指標と見なす観点は不十分であり、むしろ彼らの身体特徴を一種の「多様性」とみる観点が有効ではないかと主張した。

当セッションでは合計5発表が行われ、4発表は欧米的文化圏出身者による出自国社会（カナダ・オーストラリア・ドイツ）を調査対象とする研究であった。福祉制度が発達したこれらの社会では「障害者」という人々の分類がかなり実体をもつために、異なる身体あるいは精神状態をもつ人々を包括的に括る「障害」という概念自体を問題とした発表はなかった。そのなかで、非欧米的文化圏出身の報告者による、南側あるいは発展途上と称される地域の事例に基づく発表は、他の4発表と比べて共有される前提の度合いが明らかに異なっていた。そのために、欧米的文化圏出自者が多勢の聴衆にはやや理解されにくい点があったようで、質問数は他の4発表より少なかった。その一方、アフリカ出自の社会学者から質問を受け、質問者とは有意義な意見交換を行うことができた。この質疑応答により、従来の社会学的障害研究をリードしてきた北側諸国の研究者に対し、南側諸国の「障害者」をめぐる社会状況の一端を直接提示できたのも有意義だったと思う。

3. 今回の成果と今後の展望

成果は以下3点にまとめられる。まず直接的な成果として、質疑応答を経て、発表内容を論文にまとめていく上での具体的な課題が明らかになった。ナイジェリアの都市に詳しい専門家との意見交換により、人々の「障害者」に対する態度について、単なる都市性では説明できない、ダルエスサラームならではの特徴が出ている可能性が指摘された。この特徴については今後検証し、丁寧に論じる必要があると感じた。

2点目の成果は、学会会場内外において、自らが採るディシプリンの醸成背景とも言えるものに直接触れられた経験である。会場内で社会学が形作られてきた地である欧米圏の社会学者の発表を数多く聴くことができただけでなく、長くヨーロッパの文化的中心地のひとつであったウィーンに滞在することができたことは、報告者に会場の外からも多くの刺激を与えた。ヨーロッパからみた

² <https://isaconf.confex.com/isaconf/forum2016/webprogram/Session7025.html>

世界観がどのようなものであるか、あるいはヨーロッパ内の多様性とその背景にある地理・歴史・経済等の諸条件を肌で感じる事ができた経験は、社会学というディシプリン内で、ヨーロッパとも深く関わってきたアフリカを研究対象地域とする報告者にとり非常に大きな収穫となった。フィールドでの経験を社会学的研究としてそのアカデミアの中央にいる西洋社会を生きる人々に提示するためにはどのように翻訳するべきか、どのような配慮が必要か、課題とヒントの両方を得る事ができた。

3点目の大きな成果は、南アフリカやナイジェリア等、報告者の調査地とは遠く離れたサブサハラ・アフリカ諸国の社会学者と交流できたことである。サブサハラ・アフリカ地域の社会学者に人脈を広げることは日本に居ながらにしては制約が大きいので、今回人脈を広げられたことはとても有意義であった。

今回の発表で得られたこれらの成果を糧に、今後の第一の目標は、発表内容を論文として来年3月締め切りのISA若手コンペティションに投稿することである。また、今回の発表内容を超えた今後の見通しとして、今回得られた人脈や知見を活用して、今後はさらに積極的に世界に向けて自分の研究を発信していく所存である。

最後に、貴財団に心より謝辞を申し上げたい。報告者にとり今回の渡航は、0歳7か月の乳児を伴っての出産後初の公的な学術的集会への復帰の機会となった。当助成なしには、託児時間も大幅に制限され、これほどまでに充実した経験を得ることは難しかっただろう。当助成を受けて、乳児がいながらも初めての海外での研究発表を行えたという実績は、研究者としてのキャリア形成と育児が重なる報告者に、今後の研究人生を考える上で大きな希望と自信を与えてくれた。今後も、子どものいる女性研究者として、様々な制約を柔軟に乗り越え、精力的に研究活動を行っていくことにより、貴財団への御礼へと代えたい。